

あ　と　が　き

今日は、昨日年長組が、畑から掘ってきたさつまいもをいも汁にしてみんなで会食をする日である。

年長組は、朝から、さつまいも、だいこん、にんじん、こんにゃくと、自分達の手で細かく切って準備に取りかかっている。年中組は中庭に机、椅子を運び込んで会場作りをする。

会場の準備の時間になり、遊んでいる年中組の子供達に声をかける。

「そろそろ、いも汁会の準備の時間だよ。一緒に準備、手伝ってね。」

すると、それを聞いていた年長組のみつお君、

「いも汁の準備は僕達がやったから大丈夫だよ。」

と、胸をはって答えてくれる。

いよいよ会食が始まり、同じテーブルに座った年長組のゆいちゃんに

「大きい組さんのおいも、甘くておいしいね。」

と言うと、“大きい組さんの”というところで反応して、とても嬉しそうな笑顔になり、いもを掘った時の様子、今日切った時の様子など、生き生きとした表情で話してくれた。

みつお君やゆいちゃんにとって、さつまいもは、今まではスーパーに並んでいるただの野菜の一つにすぎなかったにちがいない。しかし、さつま掘りやいも汁会という「出会い」を経験したことで、さつまいもが、いろいろな野菜の一つではなく、“特別のもの”になったのだと思う。そして、さつまいもへの“特別の”思いを共有してくれる人が幼稚園には、たくさんいる。きっと、年長組の他の子供達も思いは同じだったと思う。

わたしたちは、3年間、幼稚園での「暮らしづくり」や、「協同性」の育ちについて研究してきて、いよいよまとめの時期を迎えようとしているところではあるが、研究のことをふっと忘れて子供達の笑顔に見入っていると、どの子も幼稚園で“特別の”なにかをたくさんたくさん心に溜込んでいてほしいなあと思わずにはいられない。そして、自分にとっての“特別な”なにかを作ること、そのことが、子供達にとっての本当の「出会い」になるのだと思うのである。

また、その「出会い」には、教師の役割も大きい。でも、私たちは役割の重大さを案外忘れていた。そのことを再認識させられた出来事が先日あった。年中組の子供達とお弁当を食べている時間。突然、みかちゃんがこんなことを言った。

「わたし、お母さんが忘れたことでもよく覚えているよ。入園式は4月13日で、運動会は10月5日とか。それに、花組（年少組）だった時、わたし、お弁当の時間いつも泣いていて先生に“みなちゃんのとおりで食べなさい”と言われて、それから泣かないで食べられるようになったこととか。」

あまりに突然の告白だったので、その後、どうしてそんなことを言ったのか、そのことは、どんな形で彼女の心の中に残っているのか、いい思い出なのか、嫌な思い出なのか、聞いてみたいことはあったのだが、“よく覚えているねえ。”と返事をするのが精一杯だった。みかちゃんにとっては、花組だったこの時が初めての先生や友達との「出会い」だったのだろう。しかし、わたしはその時のことを覚えていない。みかちゃんにとってクラスの友達や先生が“特別の”存在になろうとしている時に立ち会っていながら、覚えていないのである。確かに、入園当初のみかちゃんは泣くことが多く、その理由はなんなのか、いつも気になって言葉をかけていた記憶はある。しかし、そのことがこんなに深く彼女の心の中に刻まれているとは思ってもよらなかった。

「出会い」の時の教師の役割は大きい。というより、「出会い」は、幼児と教師とが共に創りだすと言ったほうがいいかもしれない。子供達にとっての本当の「出会い」を、より豊かな「出会い」をこれからも子供達と共に創っていきたいと思う今日この頃である。